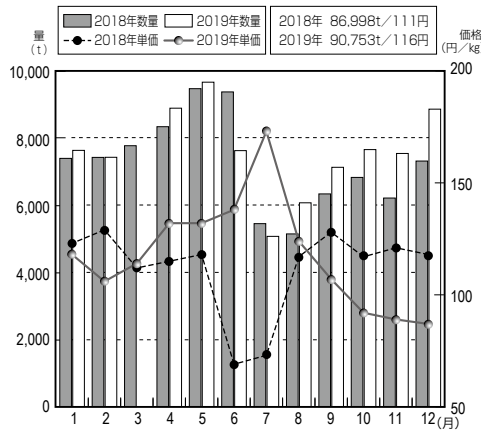


# 19年の輸入野菜の 不思議な増減品目

2019年は台風被害や大雨などの自然災害が多く、被害が大きかった千葉県を中心とする秋以降の関東産の野菜不足が危惧されたが、東京市場の野菜相場は周年にわたって平年をこごとく下回った。国産が潤沢で相場が低迷するときには輸入野菜が減る。それでも絶対数量は合計278万tというポリ

ユームだ。全体の減少傾向は当然だとしても、個々の品目に追っていくと、その減り方が異常だったり、逆に前年よりも増えたり、不思議な増減現象を見せる品目がある。多くの場合、前年が減っていた、増えていたという単純な理由だが、その背景を知って推移を見守らないといけないケースもある。

**【背景】**  
ちよつと意外に思うが、17年は量こそ少ないものの、中国産が周年にわたって輸入されていた。通常の食用は植防上で輸入できなくても、加工用としてなら到着後は密閉状態で移動させるといった条件付きで米国産を解禁したが、同様の条件下で中国産もということか。ただし、輸入単価も米国産の2倍以上あるから、米国産のマーケットを横取りしたいわけではなさそうだが、種イモの可能性はある。以降、中国産は19年の4月以降実績がゼロの不思議。



## ジャガイモ

**【概況】**  
生鮮品の輸入が1割近く増えたのは5〜6月の国産原料の端境期で顕著

東京市場における19年のジャガイモ類の入荷は、前年の18年に比べると数量で4%増えて単価は5%程度の高。一方、生鮮ジャガイモ（加工用）の輸入は前年より9%も増えた。この数字は意味がありそうだ。ひとつは17年に国産原料が足りなくて大騒動になって輸入が急増した。カ鎮静した18年は17年に比べて3割減っていた。17年の特徴は、本来なら国産が潤沢で輸入が数tしかないはずの1月に5300tもの輸入があったことだ。

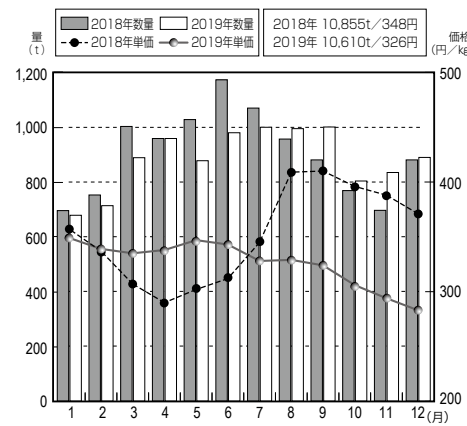
**【今後の対応】**  
19年に輸入がとくに増えたのが4〜5月である。青果用でもこのころは北海道産の残量が少なくなる時期で、出始める静岡産の男爵薯も単価が高い。加工用は一般のマーケットから当用買いすることにはほばないし、この時期は貯蔵品が芽する時期でもあり、加工用にも同様の事情があるだろう。カルビーとしての加工用の輸入対応は、国産原料調達を減らすという範囲でというのが原則だが、この時期のリスクを考えると輸入拡大は想定できる。

## ナガイモ

**【概況】**  
輸出過剰の17年、19年輸入1割増、中国からベトナムに切り替われば増か

**【背景】**  
輸出を増やすことで、国内相場を上げたいという意識は潜在的にある。17年の場合は、新物が出始めるはずの8〜10月ごろに入荷が極端に減っていた。一方、ナガイモの輸入動向を見ると、19年は1月に前年比76%増、4月に34%増、10月には3・3倍という数字を残している。輸入先ではいまや中国のシェアは落ち、ベトナムが6割強を占める。ベトナムは野菜大産地のダラット高原で、日本生産技術で野菜がかなり導入されており、日系の会社が少なくない。

**【今後の対応】**  
ナガイモの輸入量は年間1000tもないため、あまり気にもしないが、主産地が中国からベトナムに移ってきていることに意味がある。現地では日本種サツマイモの生食用、加工食品が軌道に乗っているし、日本の野菜生産技術はかなり浸透している。今後、日本マーケット向けに日本規格の野菜類を作っていくことは想定内。大量生産の中から日本規格のものを選別している中国との違いは明確だ。ちなみに、冷凍のスリおろしナガイモの輸入量は560tある。



# 今年の市場相場を読む

**51の産地からの入荷で韓国産が増、隣国でも国内産地並み扱いなるか**

## トマト

### 【概況】

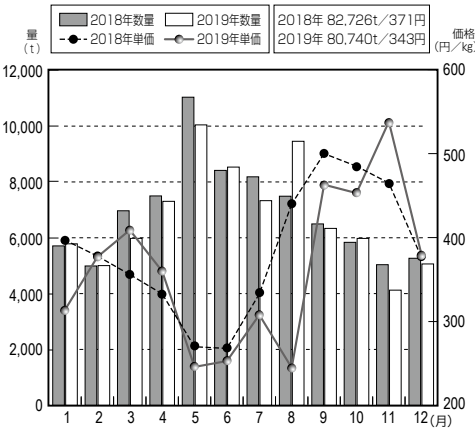
19年の輸入トマトは9377t、前年比では102%と目立った数字ではない。しかし、トマトは18年に前年比が120%だったから、2年連続で増えていることになる。東京市場の19年のトマトは、2%程度の微減で8%ほど高くなった。トマトは家庭用でも業務用でも必需品目だから、東京市場の産地数は51、うち外国産は5である。19年の特徴は、輸入量全体のうち、52%が韓国産だが、東京市場への入荷に限ってみると1tに満たない。

### 【背景】

従来、輸入トマトは業務用で細長くて輪切りがたくさん取れる品種で、食味的には酸味が強くて生食には向かないものだ。しかし19年のように、韓国産がシェア50%超えて、市場にはほぼ通っているという状況を判断すると、韓国産は生食用に流通している可能性がありそうだ。19年の月別で輸入を見ると、9月から急増して11月ごろまで多い。韓国産の輸入価格は405円と高いのは、東京市場ではこの時期、8月より200円も高い460円と高騰していた。

### 【今後の対応】

日本の野菜高騰にすぐ対応できる外国は、かつては台湾、いまは韓国だ。トマトの輸入販売は、韓国に近い九州など西の地域。北九州地区の青果卸が買い付けたか、ここには卸会社より集荷力のある仲卸業者が存在し、直輸入も実績がある。韓国は近年、ミニトマトの生産を拡大させてきたが、大玉トマトも同国の健康志向（ピタミンC）によって、近年ではかなりの生産拡大が見られる。果菜類が解禁されている韓国は日本の産地の一つになるかも。



## セロリ

**安定需要がありながらなぜ35%も減、韓国人の激減で業務用需要に構造変化**

### 【概況】

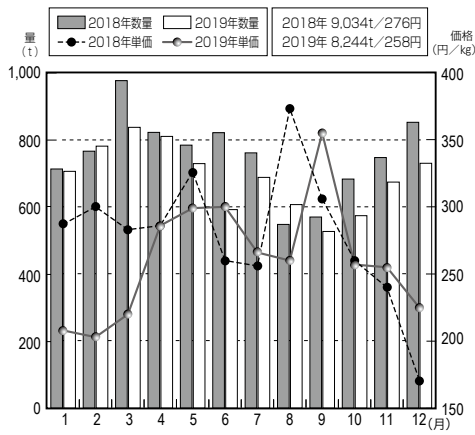
セロリは異常に輸入が減った品目である。業務用という底堅い需要がある品目だから、ほぼ輸入は7800〜7900tと安定していた。ところが19年は前年比65%の5193t。東京市場のセロリの入荷は前年より1割弱少なく、単価も6%程度下がった。しかも4割近いシェアを持つ長野産が1割程度少ないだけで、2番手の3割シェア静岡産も5%くらいの減である。国内生産は増減の波があるため、一定の輸入品は不可欠だ。

### 【背景】

セロリは、一般には好き嫌いがはっきりしている品目だが、中華料理をはじめとして、業務用食材としては不可欠な存在である。セロリはバブル崩壊後も、とくに過去10年来、輸入が増えていた品目である。それが前年から35%も減ったのだから、何か背景にありそうだ。国産では、トップシェアの長野は需要期の夏場に限らず、周年供給している産地で、静岡も同様のパターンだが、他の補完的な季節産地は作柄が確実に推移するとは限らない。問題は輸入側か。

### 【今後の対応】

例えば、ブロッコリーなどはアメリカで不作気味になると地元の相場も上がり、輸出を減らしてくる（もしくは高くなる）。セロリの輸入先はアメリカで9割近いが、日本の輸入量などは知れているから、オーダーがあれば過不足なく供給できる。すると、あとは日本側の業務用需要に変化があったからか。一つ思い当たるのは、日韓がギクシャクしていて、韓国からの観光客が大幅に減ったことだ。今度はこの新型「コロナウイルス騒動でどんな品目に影響が出るだろう。



流通ジャーナリスト

### 小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。